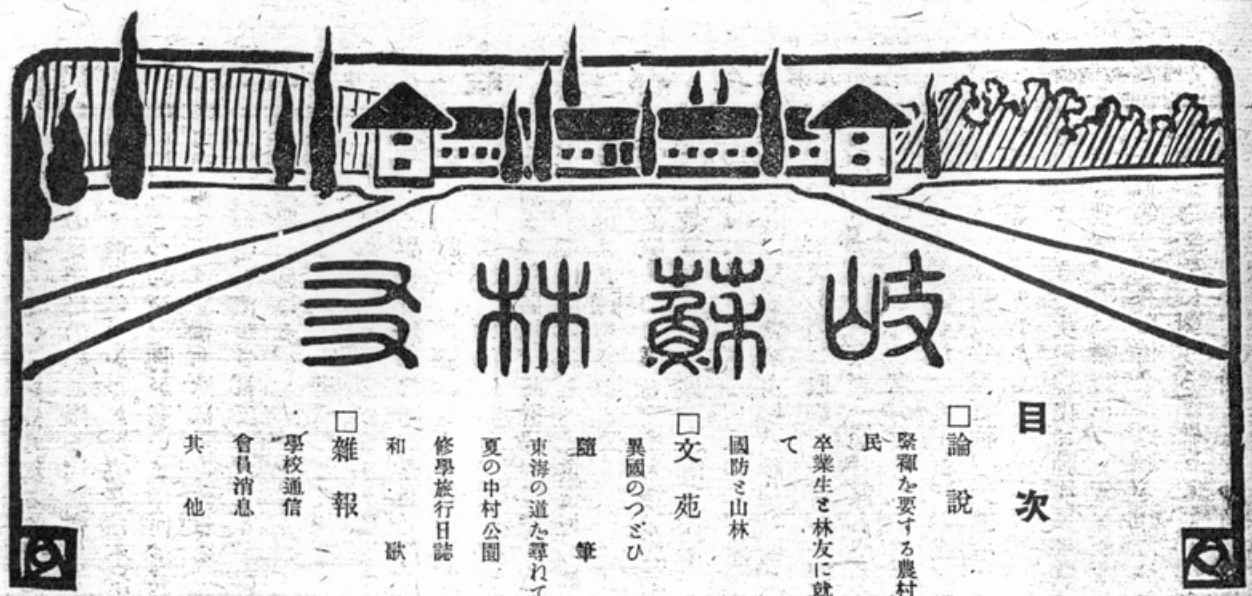

目次

□論說
緊禪を要する農村民
卒業生と林友に就て
國防と山林
□文苑
異國のつどひ
隨筆
東海の道を尋ねて
夏の中村公園
修學旅行日誌
和歌
□雜報
學校通信
會員消息
其他

大正六年九月廿五日　第九拾五號　毎月廿五日定期刊行　明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可

論說

◎緊禪を要する農村民

宇紫生

○僅かに二ヶ月を經ざる間に於ける本縣農村民思想の改變、經濟界の順潮、洵に私は吃驚したのである、山林大會の混雜に沒頭して景氣よき來會者の氣勢に共鳴して夢我夢中に三旬を經た私は漸く八月の中旬からして再び田舍巡りを初めた。

○憐むべき者よ汝の名は製炭夫であると同情に堪へないのであつた曉天の星かち月沒の明星までの間に於て受くる卅五錢の報酬に對して如何にして彼等の增收を計らんかと常に頭の一隅に蟠つて居た、彼等製炭夫の現況を見るに於て。

○負債に次ぐに負債、何時の時が彼等は洋々として濶步し得るぞ勤めよ努力せよと鞭打つ如く勵し乍ら然も裏面に於て同情の涙を禁せなかつた、農山村の細民の現況を見るに於て。

○呼鳴有難や歐州戰亂、セルビヤの一青年が爆彈を投げた許りに雲の如く歐州を修羅の巷に化して吳れた爲に日々夜々人殺しの工風が引切なしに企てられるが爲に東洋の一角の此日本が御蔭樣で助る〳〵、鷸蚌の爭は漁父の利とかや燕の蘇民も其昔甘い事を言つたものだとつく〳〵感々服々せしめる。

○先づ指を屈せしめよ。彼等の山顚に厄介物視せられて持て餘した赤松は御蔭で羽が生ねて飛ぶ樣に賣れる、成金の金具紛々たる連中及其子分共がうよ〳〵這入り込んで盛に買ひまくる、買ふも道理だ新潟の港で起工せられる船丈でも一月に二つや三つある夫が成金國の日本中に於てをやである統一令が出やうか何だらうが何處を風が吹くか、其ドック用の木材は何じや皆これ赤松と申しても溢言ではあるまい、石油屋が眼を丸くして搜すのは輸入材欠乏に伴ふ箱用松材でないか、鐵屋が成金屋になつて管も鐵では勿体ない始末、松の木管、結構〳〵露國迄參るちうすばらしい景氣、數へ立つれば際限がない彼等はほく〳〵もので云ふ通りに賣る値段がいくらするものとも打算せずに唯金になる面白さに。

○杉はどうじや、運輸力減退の爲に北海道材が入らない此時だぞと云つた調子に飛行器の樣に價が上る、工業會社が雨後の筍の樣に出來る、成金が家を建てる各種の容器が價構ず作られる、三四年の不景氣風に凋落した彼等の眼前に、かう景氣の暖い風が黃金色に吹いては後先はない、先づ賣れ札を握れと神樣が煽り立てる樣に賣る。

○銑鉄用だ、やれ綿火藥の汲濕用だやれ石炭、コークスが値が上つた、それ醋酸がすばらしいぞ、フホルマリンも大景氣だぞと來るとスミスより以上に急速力で木炭價がぐん〳〵昇る、今に宙返りをするか、逆轉をするかと觀客はまつがそんな藝當は日本

の炭屋は知らないと見ゐる集ると愚痴たら〳〵なのは腰辨の嬶に限る、炭燒き人間の仲間だとは思はなかつた炭燒君は不景氣とは何のこつたい、物が高いとは何が高いんだと嘯き在はす雜木林は雪の融けるが如くに炭窯の中に溶かされてズン〳〵と山は明かに地肌が見ゐる。

○今迄はどつときに藏はれた家の巡りの大木迄が黑骸と化して怨めしそうな俵とある

○たつと胡桃の殘したのが五圓で買ふ夫れ賣れ〳〵御大は座敷の奥にまし〳〵て夫れが銃床にならうと飛行器の支柱に使はれようと將又、電話函、時計枠、電車の窓枠に之でなくては出來ねぞへと重寶がられて尺〆が八圓も十圓もすると云ふのに天下の大勢は政治家の知る事じやと大悟徹底遊ばす

○繭は景氣じや、春蠶は八兩で秋蠶が十兩じや思はぬ金が百兩手に入つた、米も青田で三十兩になる炭はよし、杉もよし、小供の仕事に木通の蔓を取れば一貫が一圓だ竹も滅方上等〳〵一束が一圓廿錢じやないか尺〆一圓五十錢じや鐵が復古して竹と來るか、サア〳〵入つたり〳〵黃金の風が果報は寢てまて歐州戰爭が寶物、獨逸のカイゼル福の神、コリヤ〳〵。

○思はざりき是丈の變化と動搖と景氣が今農村に殺到、否、福到しつゝありとはそうして彼等が從來の借金は返濟されたか次で來るべき變化に對する準備と貯蓄は出來たか、處がどうか、盆踊に徹夜を踊り忘し徹宵酒をあひて亂舞する直江津と云はず海岸は山の大で充滿する都見物が踵をつぎ新潟の千兩演劇に二十里もある處から集まる。

○有頂点だ確に有頂点だ持つた事のない札が如何に彼等の好氣心をそゝり如何に慾望を煽り立てるか、入つた金は蠶て須臾にして都人士の掌中にとり復へさるゝのである そうして殘つた骸は如何に悲憐の跡を其處に止めるか心あるものは危期に頻しつゝある農村の現狀を見逃してはならぬ、農村問題の眞の解決はかゝる時に根强き施設を加へなければならない、山が明くなり畑が荒れて農山村民の將來が何處に確保せらるゝか。

○有頂点の時は頭が高い足元が見ゐない、金に醉うて酒に醉うて居る其數歩の先には斷崖が呑まんとして待つて居る、先達者も注意しかければならん、足元も見させかければあらんけれども得意の農村民は更に足元を踏み締めて褌と財布の口を緊締しなければならない時期である。

○我國の目的使命は遙かに〳〵遠遠である國家の目的は國民の目的ではないか對戰後の下腹が出來て居かければ土俵際に折角、肉付けた躰も直ちに投げられなければならないでないか、敢て我日本國の農村民に此の苦言を呈する。（完）

◎卒業生と岐蘇林友に就て

生田

先年雜誌部長と或卒業生との間に於て『岐蘇林友を如何にす可きや』の問題に就て隨分激しい議論のあつた事は既に諸君は御承知であらう、まだ其の舌の根も乾かないのにくど〳〵しく又茲に繰り返す必要はないのであるが而し今日の狀態を見ては聊か默する譯には行かないそこで僕は會員中の卒業生と林友と云ふ極く狹い範圍内で論じて見よう、抑々我が校友會は呱々の聲をあげてから此の方月を追ひ年を追うて益々盛大になつて今や五百數十名の會員を算して居るか今後幾万人に達するかは知れない而して現今の會員中四百名と云ふのは卒業生で殘る百數十名と云ふのは少數の職員と他は在校生徒である其の最も多い所の卒業生は殆ど官廳や會社に職を執られて然もそれは東西南北至らざるは無いと云ふ有樣である學校として又校友會として此程結構な事はない所が悲しい事には此等の卒業生諸君は何處でどんな活動をせられて居るのか暗夜の鼠どでも云はふか林友發送名簿でも探らなければ其の所在を知る事が出來ない此れと云ふのは全く卒業生が母校に對する觀念が薄いからであらう云はゞ卒業生と母校との聯絡が十分に取れて居らぬと云ふ事が證明せられるのである、かう云ふと諸君の中には林友と云ふ雜誌は即ち母校と卒業生との聯絡を取る唯一の機關ではないかとれ責めになるであらう、無論それは言を俟たない所であるが而し機關はあるからと云つて

遺憾なく聯絡が取れると云ふに定したものでもあるまい、そこで僕は思うた母校に於ては誠心誠意この事に盡瘁して居るにも拘らず其の好果を揚げないと云ふのは卒業生の多くは學校さへ卒業すればもう母校とは何等の關係はない即ち卒業と同時に母校との關係を斷つかの樣に誤解して居られるのではあるまいか、僕はこんなつまらない想像を一人でした而し他にも僕と同じ考へを持つて居る者は澤山あるかも知れん、どうでしよう諸君僕の想像は見事的中したのであらうか、それ共外により以上重大な原因でもあるのであらうか、たしか研究する價値のある實に面白い問題だと思ふ諸君は先輩として業務に從事せられて居る以上は其處に何等かの研究もあらう此等の面白いしかも有益な經驗や研究の結果を遠慮なく發表して互に研究の歩を進めたならば自己一身を利するばかりでなく即ち我が校友會の名譽であつて然も母校と卒業生諸君との聯絡を取る唯一の機關たる林友發刊の目的も茲に其の半を達する事が出來ると云ふ譯ではあるまいか近來の林友の内容は殆ど修學旅行の紀行文ばかりで、全く林友は在校生の占有物とあつた二三年前迄は毎月有益な卒業生の記事或は論說なども澤山見ゐて居つたが近頃にあつて殆ど見へない樣になつた、全く何處にどうして居られるのか暗夜の鼠とは一体何の例へであらうか、先輩とあつて後進生の模範となる可き諸君はもう少し活氣あつて欲しいものだ會員の人員から云つても四百名の卒業生は決して少なくない林友の如きは在校生徒の占有物たらしむるよりは寧ろ卒業生の物たらしめたい我が會の盛衰は固より我が校をして國立にあすもあさぬも其の要とする所は只卒業生の努力如何にあることを十分自覺せられて益々奮勵努力あらん事を切に希望して已まないのである。（終り）

◎國防と山林（中）

大坪時治

前號に述べたる如く世界列强は虎視耽々として我が東洋富源に願念着目し經濟に外交に寸毫の假借する處あく着々として其の歩を進め宿年の野望に滿を引きて事を築せんとしつゝあり

彼等白人が如何に辨疏を巧みにし詭辨を弄し曲論をあへてするも歴然たる事實は抹殺すべからずされば余は多くを語らず其の眞相摘發は讀者の推憶判斷にまかし一旦有事の際に如何に山林養成か國防と密接なる關係を有するかを結論すれば余の論旨は足れりとすあへて政邊時局の風雲は我が端促する處に非ず然れ共其の筋書のみは我が筆の描寫のまゝにまかせよ

扨て我が大日本帝國が過渡期に於ける累卵の危きより五十有余年の變遷に富み尙且つ春新高く榮に行くに際涯を知らず前には露國を膺懲し今は東亞に於ける制海の實權を握り餘勢は遠く紅海の渚を越にてかなた地中海に伸び今昔雷ならぬ隆々たる我が帝國が東亞に嚇々として其の覇權を掌握する以上は必ずや列國の嫉視を受けて何等かの事端を壞すや必せり

平和は假面なり戰爭は實權あり正義人道の爲又は子孫生存の爲には劍をも取らざるべからず銃をもにぎらざるべからず

見よ英國に於ても雷に白國の中立侵害を名として今日の戰場に驅馳しつゝあるに非ずや米又然りいつまでか彼のモンロー主義株守の主人公ならんや

よしや彼れ方便の爲め口にはモンロー主義を主張しるも其の實機會氣運の逢着相合する時に當りでは忽ち立つて其の野心を遂げんとするは彼れの本心なり

嗚呼思ひを茲に致せば世界の裏面は暗澹極まりなく恐怖之より大なるはなし

快晴千里一点の雲翳なく拭ふが如き旦の青空も氣壓一度異變を生ずれば風雲は須臾にして動き霹靂は忽にして生じ嵐は呼び鯨鯢は吼へ浪は狂ふの一大變調を來さん

況して現時は歐州の野に開かれたる戰爭の發端が奈邊より生じたるかを考ふれば徹々たる彼のアルステルダムに響きたる銃彈がかゝる大なる戰爭の發端を生みたるとは想像も及ばざるべし

是を想察すれば年々五十万人の增加率を有し其の所置所分に懊惱しつゝある帝國前途に於てはかならずや波瀾重疊の局面に遭遇

するは明かなるべし思へば深甚無量の熱情湧くと共にうたゝ我が國民の國家に盡すべき責務の重大なるを感じて措くあたはざるなりわが大和民族たるもの緊褌一番せずして可からんや（未完）

文苑

◎異國のつゞひ（日記中より）

暇夷嶋にて　華村生

運炭電車の走る響がうるさく耳に聞ゐる八月四日の午後役所の机上に毎木諸査の計算に余念ない時『電報』と受付に叫ぶ直ぐ行つて取つて見ると僕にあてたのである封を切ると『ケフゴ四ツタナカ』としあの愈々來るかと喜んだ前以つて手紙で知らしてあつた中川出張所の田中泰吉兄が暇暇旅行の途此夕張へ立ち寄るのであるそれから早速机上の仕事を片付けて所長に其の由を告げ夕張驛へ急いだ間もなく列車はついたプラットホームに出た 僕はどこに田中君が居るのかと探したが見あたらないすると二等列車の中から鼻下に美しい鬚をつけた紳士が降りた兩方の視線が一致した時兩方から『オ、』といふ聲が出たそれは田中君であつたのだ

二年餘りにかくもちがふ物かと驚いた先づ久濶の握手は交された停車場を出て吾が寓に歸る道すがら發電所の長い煙突や撰炭場に大きな建物は田中君には珍しく見えたらしい

地下三千尺の坑の中に採炭事務所が設置されてある事や幾千人の坑夫を使用してゐる大仕掛の夕張炭山の採炭の狀況等明日視察すべく話しながら吾寓へ歸つて來た早速炭礦汽船株式會社北海道支店へ在勤中の各務高峯の兩君へ田中君來たとの旨を告ぐべく小使を走らしたる後雇女の手に出來た夕食の膳に向ふた御馳走としては別にないが舊友か會して夕食なれば山海の珍味の樣に思はれて樂しい中に箸を下ろしな午後六時手紙によつて會社の兩君はやつて來たこゝに毋校出身の四名は會したのである遠く幾百里を離れた此夷嶋の夕張に落ち合ふた四名はどんなに樂しかつたであらうか遠き木曾の天地も懷しく話は毋校の寄宿舍生活を中心としてそれからそれへと移つて行つて時の過ぐるを知らなかつたそうして後涼しい北國の夜の風の吹く夕張の町へ散歩に出た夕張公園のベンチの上に腰をたろした四人やつぱり桑梓の話に落ちて行つた活動常設館からは絶えず樂隊の音か響いてくる電燈の明るいビヤホールに立ら寄つてアイスクリームやビールを傾ける時もやつぱり話は盡きなかつたそうして兩君と別れ歸寓した時は十一時過ぎだつた

◎隨筆

梶田生

仙境の想ある木曾の地を離れて父母の膝下に歸つたのは七月三十日であつた故郷の地を踏んでからは實に言い難い暑さで苦しさで身の持ち樣かない位だ一つは毋の暖い情のあるせいでもあらう雨は卅日計も降らない爲庭は龜裂を生じ灌漑水も殆んど欠乏する窮狀!! 畑作物あるは到底收穫を得る見込かない家の藪も隣の藪も雨か降つても復活の出來ない位ほれて悲慘の狀態!! 此んな有樣だから我か區では三上山神に雨乞したその爲か僅か計り降雨はしたものゝ作物は何等益かない庭や門を掃除するに適する雨結局塵押へ雨を得たそうだ此れではからんと丁度余か家に歸つて一日後に雨乞の集會か開かれた隣の二區も雨乞の相談最中だと云ふ事た集會の結果三、四年前新愛知新聞記者の探險せられた夜叉ヶ池に明朝早々雨乞に出發する事に一決した一決はしたものゝ誰も行く人かない（勿論日當や費用は區より給與する）愈々村の豪傑を頼むより良い方法かないといふことで二三の豪傑を頼んでは見たものゝ突然の場合と養蠶の忙しい爲とで一人も引受けぬ養蠶しない人は不淨たから……と兎や角言ふて行くといふ人か更にない他の二區も矢張り似た樣な事を言つて行き手かないそうた行き手のない樣あことでは雨乞もオジャンになりそうたから父の承諾を得て『私か遣らして頂きませう』と言つたら皆の視線は余に注かれた『自分は雨乞も〳〵たか遊び半分に行つて來れは善いのたナ』と思つた愈々余か行く事になつた『御苦勞で御座いますか何分宜しく

御願ひします』かどと御世事を言ふ人もあつた集會か終へて直ちに床に付いたか仲々眠れない一昨年行つて來た人の話や新愛知紙上に掲載された困難の事を想ふと廻り燈籠の樣に頭に浮んで來る『往復六里ザブザブする川＝麻繩で体を括り付けられて斷崖を攀る想ザワ〳〵と葭の繁つて居る中をたどり行く心細さ＝此んな時の處置は如何にしやう銅鑼聲張上げて『此こは御國の何百里』と歌つて行けば大丈夫た』突然余を呼ぶ聲かするハッと言つて飛び起き戸を開けば區長さんた『明朝六時頃に出發して下さるから餘り急かなくてもいゝか一寸旅費を持つて來たから持つて行つて御呉れ話によると大分危險な所たから隨分氣を付けて行つて來て御呉れそれから歸りには必ず電報を打つて御呉れそうすれは村の人達は御迎ひに出るから』と親切に言うて旅費も手渡してくれた此れなら贅澤か出來るわゝと財布にねじ込んで此度は何も思はず就睡した目覺めた時は既に太陽は三竿の高きに昇り赫と強い光線を投げて居る失敗つたと思つて時計を見たか勝川十時發の列車には樂に間に合ふから腹を作つて出發した隣村の駐在所で三人一所になつて行く〳〵ダボラを吹いてやうやく驛に着いた暫くして三人は乘車した大曾根天草笹島も過ぎ大垣に着したのは一時頃であつた池野行きに乘り換へて二里許りも乘つたと思ふ頃驛について下車した渦を醫する爲と道を聞く爲にとある氷屋に立ちよつて咽喉を濕したさあこれから愈々徒歩た眞夏の太陽に苦しめられつゝ神戸を過ぎ山道五里を辿つて横山に着し一夜の夢を結ぶ

。　。　。　。　。　。　。

翌朝早く宿をたつて又五里の道を健脚にまかせて長昌寺へと急ぐかくて午前十一時半目的地に着し何は兎もあれ角もあれ早速長昌寺の和尚を尋ねて御供物を相談するとそれかまたたかしなものばかり一行はあんた口かふさからおかつたベニ、オシロヒ、クシコウガイ、モトユヒ、ハシ、センスの七種を購ふて來いと極めて愼重な態度で語る次に祈禱のた話にうつゝた

和尚『所禱には特別祈禱と云ふものかありますかこの祈禱になりますと必ず三日間のうちに雨は降ります、しかし隱やかには降りません暴風雨でそれは大暴で御座ゐます たからこの祈禱は皆樣のた家の方の近邊の村より承諾を得おければありません御祈禱料は一回十五圓で御座ゐます夫に普通の祈禱にありますと御心ざしで御座ゐます、私も祈禱料をいたゞいて食つて居るものでは御座ゐませんから實費たけあればよろしいので御座ゐます』モヘン之れよりまた言葉をつゞけて『何日のうちに雨か欲しいので御座ゐますか』とたづねた

K『エー今日から五日のうちに欲しいものですナー』

和尚『左樣で御座ゐますかそれじや一度伺ふて見ませう』と云ふて座を立つて行つた暫くすると和尚さんはもとの座に歸つて來た

和尚『雨はじきにあげます、而して池の方へ御出にありますか、池迄は行かおくとも雨は降りますか、しかし池を見に御出になつた御方から一人で御出おさい、雨乞に御出になつた御方からわざ〳〵池迄行く必要は御座ゐません』としきりに不必要を主張するそこで仲間の一人か『雨さへ降ればわざ〳〵池迄行く必要はないねー』と云ふたから『そうた』と一行の心は一致したそれより引きかへして宿に歸つた

下女『あなた方は池の方へた出になりますかた出になりますれば明朝は三時に出發しなくては歸つて來る事か出來ませんから其の用意をしなくてはありませんからねー』

K『池へは行かないのです』

下女『左樣で御座ゐますか折角こゝまでた出になつたものですから池は一度御見になつた方かよろしゝですよ』

K『實はね私も一度行つて見たいと思つてたりますからもう一度和尚さんにた願ひ致して見ます』と前の寺の方へひきかへさうとする下女はあはたゞしく後より聲をかけて次の如くに語つた

下女『若し旦那樣あの和尚さんは非常に氣短かで御ざりますから、うまく言はないと怒つてやつてはくれませんですよ』さてどう賴んたら良いかと道々考へて行つた

K『御免下さい和尚さん前に伺ひました時には、池へは行かぬいと云うて歸りましたか良く〳〵考へて見ると若し雨か降らないとすると國元へ歸つてから村の人々はた前等か池へ行かぬかつたから雨は降らないと云ふにきまつて居ます、左樣に言はれて見ると如何も私等か恐ろしかつて引込み仕案をとつた樣に思はれますから一寸考へ直しましたそれに一昨年も後から御札を送つてやると御言ひになりましたそうですかいつまで待つても御札は到着しなかつたのです、それたから本年は池まで行きたいと思つてまゐりましたやうな譯で御座ゐますから左樣御はからひが願ひたいものです』と云うた

和尚『ある程もつともてす然し一昨年の御札は私か名古屋まで行きまして確かに小包で御送り致しましたかどう云ふ都合でしたか返戻致しましたからそれぎりにぶつでしまひまして誠に申譯か御座ゐませんでしたエ、池へ御出になるとすれば案内人かいりますよ、年とつた御方なら必ず一人で一人宛の案内人を付ける樣にしてありますかあなたぐたは血氣ゐ御ゐた許りですから一人の案内人かあればそれで結構ですどこかでは頼みにありましたですか

K『エー宿のほうで一人一圓二十五錢でたのみましたやうな都合でござゐます』

和尚『それならよろしい一寸待つて下さいオミクジを一つ上げて見ますから』

しばらくたつて和尚さんはとんで來た

和尚『到底池へは行かれません暴れます、行つたは、暴れたは、行けんは、戻れんは』と云ふやうにゐると困つてしまひます、もう急ゐで歸つて下さゐあゐたゞたかた家へ行かれぬうちに雨か降つて風か吹きますサア此のた札樣を持つて江州の方へまはつて歸つて下さい』

この言を聞ゐた時の吾々一行は只茫然として顔を見合すのみであつたしかしやむを得ぬ『殘念乍ら歸らう』と心を定めて金五圓を心ざしとして與へた札樣をいたゞいて寺を後にした、和尚は何も語らすに吾々の姿の見ゐるうち祈禱を續けてゐたつた、かくて吾々は宿屋に立ちより夜叉竹を杖として江州路を辿る、驛に至れば列車はまさに發車際故急ぐで列車に投じたかくてものゝ五六里もきた頃雨はポツ〳〵降り出し風はこうとうと暴れ出して如何にも和尚さんの言に違はゐかつた、勝川驛に下車した時はあめは覆盆の有樣、家に歸りたるは午後十時頃—多分明日は濕り祝かあるたらうと思つて床に就く

。。。。。。。。。

嗚呼彼の和尚は信仰の力を得てかゝる事をするのであらうか或は天氣の豫言者ゐるか私はあまりの不思儀に心を動かされこゝにそのありのまゝを書き並べたるやうな次第たから左樣ご承知の上ご一讀あらむ事を願ひ致します（終り）

◎東海の道を尋ねて（承前）

光風生

夢みれる夜の海よ汝は永久に暴威を振はんと欲するや、汝か一度怒りてはげしく天を打ち地をかむときは吾人は暴君の前に屈伏せざるべからざるあり吾人は絶對的なる自然の威力に服從せざるべからざらなり、平和なる浪のうねりを友とする人類も一度くるへる汝の前には怒れる獅子の前にひざまづける羊の如し、先頃激浪高き千葉の濱邊にて前途望多かりし二騒人をのみつくしたるは汝ならすやたゝ海よ汝はどこしへに靜かなれしかして吾人の友たれ我は自然を友とする事を欲するも自然の暴威をくちかんとは欲せざる也

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

夜はいたく更けぬ月は高く登れり眼を上げて遠く大海原を見わたせば漁火かげかゝゆらぎし漣の跡も消ゐ萬象皆いと靜かにやすけく夢に入りぬ

秋立つ日……八月の初天地蕭寂として秋に入るこの日伊豆の西海岸駿河灣の波近き土肥溫泉のあたりをさまよへり

庭樹を鳴らす風ゆるやかに自から秋の聲有り夕陽西の嶺にかゝらんとする頃より蟲の聲松林中より起る夜靜かゐる庭園の草叢に啼く虫聲は鈴虫ゐり

江の浦附近に於ける地學的現象

江の浦清遊館の西と東との隧道内には白色の凝灰岩の中を黑色をゐせる緻密なる安山

岩の斜面に貫ける岩脈あり又この附近の斷崖は斷層波痕の跡鮮かなり

長岡溫泉……伊豆鐵道の南條驛より十四五町の所にあり人力車馬車の便あり

この地は元峽洞なりしが明治四十年發見せし以來名聲喧傳し浴客從つて多く溫泉宿十五六軒に及べり、いづれの宿も成金連にて滿員なり余の如き一書生は待遇頗る至らずされど山中の事とて頗る靜寂なり三味線太鼓のかまびすしき音の聞ゐざりしは幸なりき

茄子の紫深くして青きナタ豆の漬けたると共に夕の膳に上る齒を當つるにナタ豆の堅きに秋の味を感せしむこの地朝霧多し窓の硝子に雫の糸をなして流るゝを見る昨夜の虫未た鳴く音をたゞす下の料理部屋にて實れる玉蜀黍を火にかけしかしきりにポンポンとよき音を放づ

菲山附近

1 江川氏邸……菲山城址の東城地を隔てゝ半ば丘陵により一見一小城塞然たる中に家茅屋立てり

2 蛭ケ島址……北條驛より十四五町の東水田にあり是源頼朝平治の亂の翌年永歴元年より治承四年迄二十年間の浮き春秋を過せし遺址なり英雄のひそみし跡を思へばなにとゐくゐつかしき情湧き出で歩をとゞむる事久し

3 反射爐……南條驛より東南を望みて白練瓦の魏然たる二個の大柱を見たり是世に名高き江川太郎左衞門英龍の反射爐ゐり余時間ゐきため是大遺業を觀る事能はざりしは頗る口惜しき事なりき

伊豆石……原木附近には伊豆石頗る多し、品質に上中下の三種あり上の部分は荷造をなして遠隔の地に送り中以下はこの邊にて重に石垣に使用すと云ふ

密雲低くとぢこめて函嶺を望見する事能ず三島の化粧水……二嶋を流るゝ水の清くして澄める事驚くの外ゐし

富士の白雪は朝日で溶ける溶けて流れて三嶋に落ちて三島女郎衆の化粧水と謠はれしはむべなる事ゐり

三嶋附近の松並木……怪しげゐる呼び賣りをなす富山の藥賣二人汗をふきつゝ木蔭に腰打ちかけて休めり隣の松下には新聞賣子ねぢはちまきに印ハンテンのすがた、甲斐甲斐しく見受しかごろりと横になり高いびきゐりしには驚きぬ時計は今九時に五分前を指せり

附記

見しらぬ國へ！見しらぬ海へ！わけ入りし故一木一石たりとも皆なつかしくしたはしかりし、出でては消ゐ消ゐては出づる夏の峯雲とる波かもめと散る海原とは夏の旅の慰安者なりき、腕も頸も背も赤銅色に染めし吾身を省みるに宛ら野蠻人の如し之も旅行の賜なりと心に喜べど欲せし傳説風景には深くふるゝ事能はず足のはこびのみ早くして筆の運びの遲かりしを耻づるゐり

◎夏の中村公園

E K 生

八月十六日僕はY君と共に稻澤驛を出發して中村公園遊覽の途に上つた汽車は次第に心地のよい朝風を受けつゝ進み行く左に織田信長の古城趾を見る花開き花落ち鶯啼き鶯老ひ人間の興亡を閲するそも幾百年ぞ山河の形勝昔のまゝゐるも三軍の主はあらず斷礎厚苔に蝕せられて芳草離々城樓の影ゐくして當年の古松獨り秀て幼川空しく流る更に進んで日本第一の青物市場として有名なる琵琶島町を見る當附近には蓮の栽植殊に多く其の花時には來遊するもの多し殊に當町を流るゝ庄内川は納涼の好適地ゐり汽車は次第に金鯱に迎へられて名古屋ステーションに着すそれより下車し明治橋に至る待つことしばしこゝより中村公園行の電車に身を投ず約三十分間許り車にゆられて我等か目的地なる中村公園に着す園内に入りて先づ豊太閤を祭れる社に參拜しそゞろ往時を追懷するの情に堪へざるものゐり

これより歩を進めて豊太閤御誕生地に至る鐵柵もてこれを保存せり面積は二十坪ばかりなれ共今は幾多の星霜變故を經て其の痕跡竹叢のたかすところとなる。

それより運動場に入ればブランコ器械体操遊動木の設備ありて小供等の嬉々として遊びたるも亦一興ゐりき小橋をうちわたりて小高き丘にのぼる小亭ありこれに憩ひてしばしの雜談を交ゆ池はあまり大ならざるも

この公園の生命あり二三の水鳥を放つ龜は、たりたり岸に這上りて甲をほすも遊覽人の足音をきゝては水中にかくるも亦風情あり時恰も三伏の日はてりてこの世をやきらくさん爲に水も沸かんとする折からとて遊ぶ人はあまり多からぬ共夕方よりは郊外散歩かたかた中京より歩を運ぶものか多しとか午後三時吾等は限りある時間に迫られて名殘たしくも中村の里を後に歸途につけり

◎第三學年修學旅行日誌（承前）

▼六月一日 金曜日 晴天 浪生

二日か間足を留めし四國を辭して今日こそは播磨の灘をも愛で古き都をも訪れんずと波止場にかゝる汽船松江丸に搭じぬ、眼前に聳立する青山脚下に盤紆する蒼海は即ち是れ壽永の昔軍馬兵船の亂れ戰ひし跡なり、

▽屋嶋　鐵拐峯頭風忽ち荒びさしも頼みし一の谷も一朝白旗の靡きてより平氏か最後と立籠りし此處屋嶋血氣に逸る源九郎又もや怒濤を蹴立てて一氣呵成四國に打ち渡れば平家再び海に浮びつ、三年か間春を迎へ春を送りしこの地を離れてそも何地に流離ひ行かんとすらん長汀曲浦依稀として白砂の覆ふに任すれ共既に叛きし地なれば汝か爲に波風防ぐ渚もあらじに、あはれ一門天下に身を置く所もおきかみもすその流の末に都はなきかいざさらばやみおん、恨は長し七百星霜山青々の容を變へず水蒼蒼の色を易へずして永へに人を悲しましむる哉小舟に高く翳せし紅扇の話は殘れど、

▽播磨洋　船の進むにつれて眼界漸く開けぬ、溶々たる初夏の日の輝く海の面波なく瀾おくして我が船の進みし跡のみ膏を流して一路遙かなり左右に聚散離合する數多の島嶼の遠きは紅霞模糊として碧黛を送り近きは樹翠草綠鮮かに影を涵して白舷を染めんとす、見渡す青松白砂の岸、其岸を打ちては折れ返る波、波路の末に浮き立つ雲、雲間に翔け入る名知らぬ鳥、鳥かとも見ゆる沖行く白帆、白帆が生みしかすなる小舟、小舟を洩れくる斷續の音、波渺茫たる海面にさまよふあはれ風ぎたる時は慈母の如しとや歌ひけん實に太平の極平和の至りなる哉清掃せられし甲板に坐し柑を劈きて壯語するも樂しく萬里を渡る海風に梳らせて嘯くもよし、眉ひきのべし紀伊の遠山を望みて『茫々たり矣我が懷美人を天の一方に望む』を誦するも亦快なり斯くて船舶輻輳の神戸港に著きぬ、

▽神戸　洋館櫛比する居留地を眺め忠肝永く懦夫を起たしむる大楠公の湊川神社に賽して直ちに車上の人となる、初夏の惠風に搖られ車窓に變轉し行く景を愛でつゝ進めば程なく七條停車場なり、

▽京都　金鳥西山に沒し暮色既に東山をこめ叡山を廻り早くも賀茂川に襲ひ來りぬ、折から小雨さへ降り添へば金色燦たる堂塔伽藍暝然蕭然たる大路小路も濡れて優婉なる古き都は一層の幽雅を增しぬ、長橋靜に暮れて道行く人も少くなりし街路を青味を帶べる軒燈に照らされつゝ我が宿に急ぎぬ

▼六月二日 土曜日 晴天 正風生

湯湲たる鴨の流れに夢は破られ嵐山の勝をさぐるべく屐を進む途中電車に乘じ身は早くも京都郊外の人となる

▽嵐山の景　山裾を流るゝは大堰川水は清くして底の小石も數ふべく溪川の常として淺が如きも其實深し此の川の上流は保津川にしてかの躑躅咲く頃舟下し峽中の山水の勝を探るによろし渡月橋の袂には老松枝くねりて寒翠滴るゞあれば臥して龍に似たるあり風致限りおし其か上には酒閣雲に聳ねつ茶棚水に傍ひつとりゝに客を延く若葉の山二町上れば大悲閣あり登りつめし絶頂は拳大の地に過ぎざれども名高き大悲閣千光寺あり香烟緩う立ち登りはては淡く雲に化するさまはた長閑なる眺めあり香閣の前には棚を架し人の休憩するに供す眺むれば京都の市街は漂渺として烟霞の中にあり此附近は櫻多く花時には香雲搖曳する所なるも惜しや今は葉櫻となりて櫻花の香に醉ふを得ざりき

▽嵐山を後にして妙心寺天龍寺等にいたりて參詣せり金碧は剝落したるも今尙莊嚴にして名刹たるを失はず高僧の遺蹟床しきかな何れも境内は廣く遠望には富まずと雖も林中の眺め寺庭の勝概を記すべきもの鮮からず

▽金閣寺　林泉水の結構布置は當時義滿の威勢を以て妙技を凝らせしもの其の巧緻なるは言を待たず幽邃の居を占めて遙に人烟を遠かり四隣寂寞として唯松風の聲溪れの音のみ聞こゆ門扉は蔓々たる葛藤に閉さる

▽台杉　金閣寺を出でゝこれより北山の台杉作業を見學せむとて道とへば一人の商人態の男『台杉まではまだ〳〵中々遠くありますわざ〳〵行きなさつても効果は少くかへつてこれより數十町先きに台杉作業をやつて居る民家がありますからそこで實地御見學なさつた方が一番ですよ』吾等はこの言に從ひてその民家を尋ねたり烈日は威を逞しうし汗は瀧の如しかくしてとある民家にいたり刺を通ずれば主人は心よく諾して吾々の質問に對し熱心に台杉の話をなせりそれより主人の案内により附近に建築中の家屋にいたり使用せる垂木につき其の實際を見學せりこゝに於て吾等は臺杉に關する一般の智識を得たり

▽嵯峨附近　廣大なる竹林を各處に見受く何れの竹もその上部の纖斷せらるゝを不思儀に思ひて道行く人に問へばあれは竹の上長生育を止め其の勢力を根に送りて良好なる筍を採取せんがためなりと答ふ

▽京都御所　市の中央部にありて内外廓に分る往時外廓には諸親王哲宗等の邸ありし由なれども今は公園となりて士農工商の差別なく何れも杖を曳く幽鳥は老樹になき東風に寂寞たりあゝ誰かこの流轉の世に處し一榮一落の習はしを感せざるべきやらんや

内廓は孝明天皇の御宇の御造營にかゝるも南門をもつて正門となす御所を拜しては國勢變遷の如何を喚び起し轉た感激の涙にむせぶ

六月三日　日曜日　晴天　正風生

夢路を辿る枕の山に優しう響く鐘の音に靜かなる京の一夜は明け書間の苦熱赤帝の威も亦何れの所に去りたるか涼氣肌を襲うて清風沸々たり吾々一行は朝食をすまして旅裝を整へ大坂行きの電車に投ず南海電車にたとらざる乘心地いつしか京の町も後に伏見桃山驛に下車し桃山御陵へと急ぐあたりは一面杉松檜等の樹種植栽せられて何れも五六尺に成長せり敷砂光る御陵道を行くこと十數町にして御陵に達す欝蒼たる松柏の林中にまします明治大帝の宏大無邊なる神靈にむかひ砂礫に跪きて參拜を終るそれより歩を移して皇太后宮の御陵に詣で在天の慈鑒を仰ぎ奉れりかくて一行は乃木神社に參拜し再び電車をかりて伏見稻荷にいたる官幣大社稻荷神社は驛の前にあり堂宇宏壯にして數百の華表は並立し緣樹蒼欝之を圍み翠紅相映ず參拜を了し再び電車に乘じ卅三間堂にいたりて俗に云ふ三萬三千三百三十三體の佛に參詣せりそれより道を清水寺にとる此日炎威尤も烈しく道上の砂石悉く熱し洪爐中に坐するが如く流汗淋漓として背に沸く口喘ぎ喉竭くこと雷に吳牛のみならずかくて一行は驀臭き所を通りぬけて清水寺にいたる寺はあたかも山の中腹にありて所謂清水の舞臺をなせり俯瞰すれば京都市街は雙眸のうちに集り景色いはんかたなし有名なる音羽の瀧は時ならぬ白雪を飛ばし飛沫人に濺ぎて衣襟之がために淋漓たり亭の前後には老樹日を遮り常に萬斛の涼を貯へ溪聲と相待つて暑さに病む人を蘇せしむ吾等はこゝのベンチをかりて晝餉をともにし智恩院にいたる音に名高き清水燒は道々の店に陳列せられて一入吾等の目をひきたりき智恩院は八坂神社の東北に位し淨土宗の總本山にして法然上人の開基なり左甚五郎の手のあとなりと云ふ有名なる鶯張りは各々をして甚だ興を深からしめたりこゝに於て本日は自由行動を許され各自午後六時迄に旅館に集合する事を約して袂を分つ吾等はそれより名高きインクラインを見んとて歩を運ぶ京都ホテルの側を彼方へぬけし時は夕陽既に西山に隱れ吹く風稍々涼しく川沿の柳は淡烟を帶ぶかくてしばしインクラインを眺め入相の鐘の音に誘はれて南禪寺の境内に入る古りたる山門は高く聳ねて昔の名殘りをとゞめ鐘聲寂々たり吾等は夫より踵を囘して電車に乘じ旅館に歸りしが或は御所に動物園に銀閣寺に本願寺に其他各地に散在せる名所舊蹟神社佛閣に訪れしものもありき實に京都は桓武天皇遷都以來一千餘年にして一山一水は云ふに及ばず撮士拳石また悉く當時を記すべし況や洛中洛外星の如くに連る名祠巨刹自ら人間の榮

枯盛衰を語るに於てをや風景のよろしき獨り詩筆に適するのみならざるなり夕食をすまして最後の京の町を辿る新京極は市中第一の熱踏地にして劇場寄席等櫛比し鳴物の響晝夜喧し有名なる夜櫻を見んとて圓山公園にいたれば電燈の光は晝をもあざむき潰水の流れは潺湲として幽琴の如く小徑の絶ゆる處には石橋斜にかゝれり逍遙すること漸時夜氣身に迫りて輕寒を催しければ名殘りおしゞくも宿に歸りて二旬に跨れる旅行最終の夢をこゝ西京の宿に結びぬ

六月四日　月曜日　晴天　翠峯生

今日は古都の晩春に離別せざるべからず三時早くも起き出でて旅囊を纏め美登利館を出づ常に賑かなる三條通の今朝はいと靜かなるを眺め烏丸に出て大路を四條五條と遠き七條まで急ぎぬ京都は晝も靜かなる感ある町なるに曙なれば更に靜かにして鴉などの電柱にとまれるが驚きて羽音騷しく鳥邊野の奥の邊へ飛行くあり

平安なる名は能く實を表はせり柏原帝鴨桂二川渡かに流るゝ此山城に都を定め給ひしより天豪の風姿は上下一千年の詩人畫客に讃美せられて茲に金玉の響を發せり佛敎と儒敎との眞隨は平安朝に顯はれ和漢文藝の華は此所に混成せられて錦綾の美を現せり歷史は文學なるか將た藝術なるか吾之を知らず然も歷史は文學に依りて生命あり藝術に依りて光彩あり燎乱春を欺く平安朝の文學と藝術とは千年の歷史をして爛々火花を發せしめき歷史は水自然は器なり水は方圓の器に隨ふなるかな平安史は山紫水明の山城に隨へなることゝ

七條を出づる頃は早や人も荷車も往來しそむ。DELICACY の都歷史の都は又經濟の都物質の都たらんとして徒に過去にのみ執着するをやめて未來にも生きんとする也

逢坂山を越ゆれば近江にして海見ゆ石山驛附近に右に岩間寺石山寺左に三井寺あり西國三十三個所札所の十二十三十四番なり巡禮ならねども寺々に寄りては御詠歌口ずさみつゝ湖岸の松聲を聞き度かりき勢田川の鐵橋を渡るときに右に唐橋見ゆ粟津原會も沿線にして今井兼平の墳墓あり木曾殿何の田にて苦しみたるか米原まで湖岸を走りて醒ケ井長岡をすぎ近江美濃の界なる寢ながらにして兩國人の語り得ると云ふ寢物語を越ゆれば關ケ原なり廣き所あらず名古屋に十一時頃着乘換の時間一時間以上あれば驛前の清駒旅館本店樓上に於て師弟同席に愉快に慰勞的午餐會を催せり更に土產おど別ち合へり

零時五分名古屋發木曾路へ向ふ財囊は輕けれど腹で鞄は重し或ひは眠り或は默し或は私語く然れども大聲に騷ぐこともなさず靜かに故郷に歸らんことを願へり

思ふに我等が半月の修學旅行も殆ど一年の經過に似たる哉陽春は是伊勢より高野のあたゝ盛夏は和歌山より四國路あたり金秋は神戸より京都の二日遂に冬は京都より我等を木曾に歸らしめたり伊勢奈良吉野まで南枝の梅漸く綻びたれども春なほ寒し春風駘蕩桃李一時に開きて吉野より高野に及ぶ和歌山以來濃綠陰深しと雖紅紫の見るべきもの稍少し但眼に見すと云ふにはあらず船旅を終へて神戸に來れば月は明鏡をかけ樹は錦繡を織る京都に來れば樂しけれども肅殺の風多く遂に冬に入りて樂しき年は暮れんとす我等は思を凝し心を沈めて反省回顧せざるべからず精神的物質的共に支出收入を決算せざるべからずあゝ我等はよく純利の多額を收め得しや憶うて此に至れば無量の感なくんばあらず

群盲鼎を探ぐれば其の足を摩し其耳を撫し而して各其見る所を異にす鼎は鼎かれども各特徵を異にする也旅行記は之に似たり或者は鼎に足あるを知れども耳あるを知らず或は耳あるを知れども足あるを知らず共に完全ならざる也是れ巨廬の山の全景の盡し難き所以分て之を見合して之を見仰いで之を觀俯して之を觀る斯くて後初めて全し

我等が筆幼にして惡あれども豈敢て鼎を見る離婁が明巨廬の山を縮めたる靈公の術を助くるあしと云はんや旅行記は我等が筆の如き不備をよしとせざれ共必すしも旅行案內たるを要せざる也我等は我等各自の『我』あれば足れり

末筆おがら諸先生以下諸君の御迎へを深謝す（終）

◎駒ケ岳へ

第一日　星波生

曉の風の冷かさ夜の惡魔を打ち敗つた凱歌の聲に送られて私達二學年の一行は出發した突鳴らす杖鬣る胡座露深く夏の曉を町の靜寂を破つて木曾福嶋のステエーションへステエーションへと急ぐ

淡靄と灰色の雲に迎へられて上松驛に汽車と別れて草鞋を踏みしめた山際の帶形の町には數多の御嶽登山者が集つてゐた白い衣に白の鉢卷振り鳴らす鈴が涼しい朝の町に應しい私達は自然を趁ふて走る遊牧の民の樣な白衣の人達を後に駒の嶺に今日の華やかな夕陽を見樣とするのである

『愈々登るんだ子』誰か云つた然し駒ケ根の村はづれ迄一寸小一里程あつた路傍の草の緣か水々しい森の蔭山の麓桑の中おどに板葺の家が曉の星の樣に散点されて南瓜の花か今を眞盛り

大分ホワイトシャツが汗泌みた頃里宮に着いた一同は太い新しい注連繩の大きな華表の前で涼しい朝風を思ふ存分吸うて一休した道が赤土混りから黑い腐植土に變つて處々凹凸が增した私達は幾度か冷かな夏草をつけた馬に會つた彼方此方の霧の谷間から駒の嘶が勇ましく響いた『眞實に駒ケ根だ！』と駄洒落れが時々思ひ出した樣に林間を洩れる朝日が眩しい

『御岳が見ねる』故郷の山を望む樣に歡喜の聲を一齊に發した時前は滑川が美しく白布を横へてゐた草の根や木の蔭から湧き出た水は草深い道をジクジクさせた

これから眞實に登り始めるのであつた熊笹と稈樹を分け出た美しい瀧を過ぎると其處から暗い森林が果しなく續いた積つた落葉が氣味惡い音を立てゝ傾斜か次第に增して來る眞先に嶋內先生西澤先生と中田先生は中央と最後とに其間に私達は挾まれて杖を鳴らし乍ら一歩一歩スロープをたどつた樹皮の滑らるあのが骨くれ立つた木に移ると傾斜が益々甚しくなつた

『三合目』先鋒の者が呼ばはると遙か下蔭てオ、イーと響く幾百年を經た針葉樹の中を苔の香を追ふて進むだ日影を帶んだ白い雲が大きな影を山から山へ漂はせて谷から谷へ動いて行つた朽木の下を這ふたり藤蔓に捕つたりした遠く上の熊笹の中に麥藁帽が見ねると小屋だ！五合目聲を賴りに應と許りに石を越ね笹を踏み長い時間水と小屋とに餓ねた我達は一散に小屋を目がけた展望は此上なく佳い程近い谷間の大きな岩と岩との間に美しい水が滴る樣に湧いた之れが金明水だ町の水おどよりは餘程冷たい誰も彼も云つた眞實の話だ時刻は早いが頂上小屋迄が無いと去ふので晝食を取つた再び此處を後に進んだ左右の谷間から斷間なく白い雲が上かる巨岩巨石の曲道を上へ上へと仰ぎ見た木々はいつか私達の背丈位になつて偃松が一面に靡いて居た山も谷も麓で見たのとは丸で異つた趣を呈して居る山は廣い連絡を惜氣も無く前に展いて見せ谷は幾個にも分れた脈を地圖の樣に明らかに並べて見せた

釜の樣な谷底には鼠色の雲が盤つて見ねた

『九合！』と遠く霧の中で響く偃松は細い石塊の道を頂へ頂へと導いた雪割草や黑百合等黃に赤に麗しく私達を迎へた

時々怪鳥の聲が雲の渦卷が上る毎に聞ねた前に轉りさうにある甚い道だ煙が見ねる煙が勇氣百倍した早や先鋒の人達は雪の礫を握つて雲の合間に立つて居た遠く志した山の嶺へ私達は到着したのであつた

頂度十一時二十分頃未だ殿の人達は來られない一時間程して皆揃ふた頃上へ登つて見た折から押寄せた濃霧がヒタヒタと服に泌込む風雨に曝された注連が小さな社を守つてゐた谷々には皆白い雲がムク〳〵してゐた小屋の焚火は相變らず烟むい一足遲れて八高の服章を付けた學生八九名が到着した名古屋新聞記者二人が之れ等の人を伴うて登山したのであつた八時頃晝食を濟した私達は空腹を抱くて飯を待つた

三時半頃ヤット飯が煮ねた空腹に不味い者なし後は實に極盤狼藉記者の人達も少からず面食つたのであらう戶の間から霧が吹込むとバラ〳〵と雨が屋根板を打ち出した直に蒲團が敷かれて我先にと床に入つたまだ早いから中々眠れないワイワイ騷いだ夕日夕日と號ぶ聲に周章てゝ跳足のまゝ外へ

外へと飛び出す冬は全く雪で埋められて終ふ谷―其れを隔てゝ眞紅の太陽は静に清い波の中に沈んで行く私達は皆明日出發の用意にと床に入つた余り寒くはない一行が小屋に着いた時爺さんこんな事を云つた『今年は例よりは余程暖かう御座んす』折々外には怪鳥の聲と風の號が入り亂れて居る

雜報

◎學校便り

◎マラソン競走　本校に於ては九月三日午前六時半福島小學校庭を起點とし上松出張所を終點とせる約七哩五分の全校生徒のマラソン競走を行ひたるが暑中休暇後間もなき事と且つは學期試驗を眼前にひかへたること故如何と多少疑問せしも意外の好成績を示し寧ろ昨年に比して優秀の結果を得たり今當日入賞せる二十等までの人名及び時間を記すれば左の如し

到着順	所要時間	姓名	
一	三十六分二十七秒	伊窪友一郎	三年
二	三十六分四十七	井上寛一	三年
三	三十九分三	小池政人	一年
四	四十分十六	原榮太	一年
五	四十分四十三	今井忠雄	三年
六	四十一分二十	長田克巳	一年
七	四十一分四十五	青木忠太	二年
八	四十一分五十	早川嘉一	一年
九	四十二分二十五	吉村幸助	一年
十	四十三分十五	丸山林一	二年
十一	四十三分三十	星重男	一年
十二	四十三分二十四	中越三郎	一年
十三	四十三分三十三	小野津四郎	三年
十四	四十三分三十五	千田瑞穗	一年
十五	四十四分八	小池孝三	一年
十六	四十四分九	福川正三	三年
十七	四十四分二十	吉澤豐一	二年
十八	四十五分二十五	野本美嘉	二年
十九	四十五分三十	向井一男	一年
二十	四十五分四十	篠原收英	二年

◎三年生視察旅行　三年一同は九月五日西澤教諭に引卒され三泊懸けにて王瀧小川阿寺等の山林に入り伐木造材運材等の實況を視察し八日夕刻無事歸行せり

◎校友會講演　九月十一日午前十時校友會にては松本中學校教諭野口源三郎氏を聘し体育に關する講話並に競走に關する講話を聽けるが野口氏は自己の經驗を語り凡そ一時間半にして終了晝食后更に校庭たに於て短距離競走に於けるスタート姿勢等に付實地指導をあしたるが流石全氏は今度の東洋オリンピック競技に雄名を轟かしたる猛將とて指導振も勇壯を極め我校健兒の意氣をして彌が上にも高からしめたり

◎會員消息

○田中磐一君　豫て青島守備として出役中の同君は任期結了九月十二日青島出帆歸還十七日豐橋に到着原隊に復歸せられたり

◎向井君　今回山梨恩賜縣有財産管理課獸津出張所勤務を命ぜられたり

◎皆川秀雄君　七月より西筑摩郡開田村小學校に奉職せられたり

◎今井武雄君　は今回臺灣三菱竹林事務所に傭聘せらるゝ事となり八月中今市小林區署を辭し目下歸鄕中なるが多分十月初頃赴任のはずなり

◎今井欽君　は今回長野小林區署を辭し樺太廳林務課に傭聘せらるゝ事となり九月十二日出發赴任の途に上られたり

◎小田寶君　は九月より西筑摩郡野尻小學校に奉職せられたり

◎吉田鈞一郎君　は八月八日横濱出帆のサイベリア號にて布哇へ再渡航を企て廿八日ホノルヽに安着の旨通知ありたり

◎高樋氏弔慰金申込報告第二回

金貳圓（現金）　中村豐治君
金拾圓（仝）　本多靜六殿
金壹圓　北川信美君
金壹圓　塚本三樹君
金壹圓　奥原吉右衛門君
金五拾錢（現金）　小池金三郎君
金五拾錢（現金）　小池新伍君
金五拾錢（現金）　小羽根安治君
小計十六圓五十錢　累計十七圓五十錢

◎謝恩金申込報告（第二回）

金貳拾錢（征矢野書記ノ分）（現）　出雲秀一君
貳圓　松嶋九平君　北川信美君
　　　奥原吉右衛門君　米山修君
　　　塚本三樹君　川合清行君
　　　樋口德一君
五拾錢（現）　小羽根安治君
小計二圓七十錢　累計三圓二十錢　第二回
大場教諭ノ分（現）
四拾錢　出雲秀一君
五拾錢　川合清行君
五拾錢　樋口德一君
小計一圓四十錢　第一回
加藤書記ノ分（現）　出雲秀一君
貳拾錢
貳十錢（福山教諭ノ分）（現）　第一　出雲秀一君

◎編輯餘錄

左記は本田博士より七宮會長宛の手翰なり同博士が故高樋君の爲に同情せられつゝあるを一般會員に知らしめんが爲に茲に載錄することゝせり

拜啓益々御安康奉賀候陳者此度安蒜長野縣技師より貴校友會にて高樋博氏弔慰金募集中の由承り候に就ては取不敢金拾圓小爲替を以て同封にて御送附申上候間可然御取斗被下度願上候尚又同氏の遺族へも宜敷御配慮被下度願上候右御依賴まで匆々

九月三日　本多靜六

大正六年九月廿三日印刷
大正六年九月廿五日發行
編輯兼發行人　長野縣西筑摩郡福島町四〇一番地　安井正夫
印刷所　長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地　嶋崎印刷所
長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地
長野縣西筑摩郡福島町二八九番地